

29th

◎稲門建築会特別功労賞（業績）

石堂 威

苗 1964
都市建築編集研究所代表

◎主な経歴

1964年：早稲田大学理工学部建築学科卒業、株式会社新建築社入社
1980年：「新建築」編集長（〜91年）
1986年：「住宅特集」創刊編集長（〜88年）
1992年：「GA JAPAN」創刊編集長（〜95年）
1996年：都市建築編集研究所設立

◎編集・監修を手掛けた主な書籍

「素顔の大建築家たち」弟子の見た巨匠の世界 建築資料研究社（2001年）
「日本の現代住宅（1985〜2005）」TOTOTO出版（2005年） など
◎稲門建築会での活動、編集・制作等を担当した稲門建築会・建築学科の刊行物
広報委員会（1999〜2003年度、2010年度は広報委員長）
早稲田建築ニュース「WASEDA ARCHITECTURE」
稲門建築会機関誌「早稲田建築」WA（1999〜2016年度）
稲門建築会機関誌「WA 2011 特別号 Waseda Architecture 100」
建築学科創設100周年記念事業（2011年）
建築学科「早稲田建築学報」

Waseda Architecture

稲門建築会

建築メディアを牽引、稲門の活動も長く支える



（イラスト：3点とも宮沢 洋）

1980年前後から90年代半ばにかけて、石堂威氏が編集長を務めた建築専門誌のお世話にならなかつた設計者はほとんどいないでしょう。「新建築」、「住宅特集」、「GA JAPAN」は今日も日本の建築専門誌の主軸を担い続けています。これら3誌の編集長として、建築メディアを牽引されました。特に「住宅特集」と「GA JAPAN」は創刊編集長として立ち上げに携わるなど、折々の建築界、社会の潮流を映し出す専門誌づくりに尽力されました。

もう一つの大きな業績に、稲門建築会への貢献があります。広報委員長（2001〜02年度）在任期間の前後から20年近くの長きにわたって稲門建築会の広報活動を支えました。1999年度から2016年度まで「早稲田建築ニュース」「早稲田建築（06年からはW）」や、建築学科「早稲田建築学報」などの制作、編集協力を担当しました。大成といえる建築学科創設100周年記念事業「Waseda Architecture 100」（2011年）では、新建築編集部時代より蓄積した見識と人脈を駆使して、誌面全体の企画構成から寄稿の手配、編集制作までをほぼ一人で手掛けられました。下欄では、携わられた雑誌・発行物の編集後記と執筆記事から石堂氏の文章を拾い出しました。推薦者：守山久子（苗1986、編集記者）

「新建築」編集後記

編集長の目は 折々の建築・社会をどう捉えたか

（1980年代を迎えるに当たって）

……新建築1979年9月号より
戦後の建築デザイナーの流れを、50年代、60年代、70年代と大きく分けられれば、それらは「起」「承」「転」にそれぞれ相当するように思われます。50年代は日本における近代建築の確立期であり、60年代はその爛熟期であり、70年代はその転換期として位置づけられると思うからです。では、80年代は「結」の時代となるのか、興味あるところですが、実際は「結」の意味を各目はどう捉えるのかにあるのかもしれない。その捉え方、そしてその上での行動様式によって、「結」が「起」にもなり、「承」にもなり、また「転」になって、新たな動きが歴史として語られていくのです。

（新建築の年間総目次に関連して）

……新建築1980年10月号より
どの種目に入れたらよいか、あるいは新しい種目が必要としているのか、判断に迷う建築に毎年出くわします。このことは、限られた数しか扱えない雑誌の上にも明確に、新たな機能を持たせた建築の出現が感じられ、それが記されていることを示しています。（略）



さまざまな発意、さまざまな行為が建築をより豊かにしている現実を見ていると、建築は死なないと改めて思うのです。

（住宅論に関する自身の思い）

2年生の歴史の授業で、書物なり論文なりをひとつ選んでそれについて思うところを書けという課題があった。そのとき選んだ論文が藤原一男の最初の「住宅論」であった。そのなかの「日本には『空間』の概念が生まれなかつた」という言葉に触発されて書いたのだが、内容はもう覚えがない。

（建築家にとって師の存在）

編集長を兼ねてきた今、建築家が師をもつことの意味と重みを時に思ふ。傍にいて身が

（建築家の構想力について）

……新建築1983年1月号より
また一方、今日は、建築家の個人的充実が十分に感じさせられる機会を多く持ちながら、しかしなぜか小さくまとまっているのにはなにかという印象が社会にも建築家個人にもあるように見受けられます。社会の動きに対応してというよりも、社会の動きを講起するほどの大きな構想力が求められているといえるのではないのでしょうか。建物の大きさはもちろん関係なく。



（村野藤吾氏の逝去に際して）

……新建築1985年2月号より
不謹慎な言葉かも知れませんが、村野氏は絶えずハフオーマンスを続けてきた偉大なハフオーマーであったのではないと思われまます。氏の中からあふれ出てやまない思想・着想が、どんななかその実現へ向けて氏を駆り立てたことだったでしょう。特記すべきは、氏はそれらを粗野なままではけつて表に出さず、考えられる最良の形姿に高められるために練りに練られたことです。そこに、氏の建築がハフオーマンスとして常に影響を持ち続け得た、作家としては当然ともいえる秘密を見ることができまます。（太字は推薦者、以下同）

（野武士の世代について）

80年代はポストモダンの動きを主調としながらも、さまざまな主張が繰り広げられた。またそれらを実現する技術を含めた社会的環境が整った特異な時代でもあった。そして、時は移り、野武士の世代である者は熱気が飛散して彼らの時代は終わった。あとは、自分との闘いのために、闘うために。

稲門建築会 明日への提言と 温かな眼差し

（早稲田出身者の連携について）

……早稲田建築ニュース38 2009年7月発行
毎年秋に開催される合同クラス会もOB・OGの数からいえば集まりすぎて大変だという悩みが出て不思議でないのに、ほとんどのところで落ち着いています。みなさんそれぞれの能力にあふれ、独立独立の精神が強いからかと思われまます。世は情報の時代、情報の宝庫でもある稲門建築会を駆り立てておくのはもったいないのでは。

（学生委員の参画について）

……早稲田建築ニュース65 2002年11月発行
今年度から理事会に学生が三人加わり、マガの立ち上げや配信に活躍です。ITに関してだけではなく、何よりも心強いのは、しばらく母校から離れていた理事たちと大学の距離を一気に縮めてくれたことです。



稲門建築会で制作・編集等を担った刊行物の一部

（学科創設100周年記念誌によせて）

……Waseda Architecture 100 2011年3月発行
環境系を初めすべての分野で優秀を誇る早稲田をいかに誌面に表出するかは、次に向けて大きな課題ではないかと痛感しました。これを克服するにはデザイン面重視でやや等閑視されてきた各分野の学内・学外の縦・横のつながりを誰もが目に見えないかたちにおくことが必要で、そうでないとは将来、総合建築学科としてバランスを欠き、リーダー格の伝統を他に譲ることになりかねません。